

2021年10月31日（日）「人生のチューニング」

ガラテヤ 1:18-24

18 それから三年後に、エルサレムに上ってケファを訪ね、彼のところに十五日間滞在しました。19 しかし、主の兄弟ヤコブを除き、ほかの使徒には誰にも会いませんでした。20 神の前で断言しますが、私があなたがたに書いていることに偽りはありません。21 その後、私はシリアおよびキリキアの地方に行きました。22 キリストにあるユダヤの諸教会には、顔を知られていませんでした。23 ただ彼らは、「かつて我々を迫害した者が、当時は滅ぼそうとしていた信仰を、今は告げ知らせている」と聞いて、24 私のことで神を崇めていました。

### 【序論】

福音宣教の働きに携わっておりますと、時々ある種の不安が心をよぎることがあります。それは、自分がやっていることはこれで良いのだろうかという思いです。どんな仕事にも共通する面はあると思いますが、福音宣教という働きの特殊性はやはり独特のものがあります。宣べ伝えるべき真理（十字架の福音）はいつ如何なる時代であっても変わることがありませんが、10年経てば価値観もテクノロジーもすっかり変わってしまう世の中であって、「変わる事のない福音」をどう宣べ伝えるべきかという問題です。時代に適応しながら、常に同じベクトルを堅持し続けるという、なかなか技術を要する働きと言えます。伝統にしがみつき置いていかれてはいないかという不安がよぎることがあるのです。当団体では「大宣教会議」が年に数回持たれ、そこでは前年度の宣教報告や新年度のビジョンが話し合われます。これは私にとって「確認」の時であり、自分の働きの方向性が間違っていないかどうか、狭まった視野を広げるのに役立ちます。また、日本福音同盟の総会などに出席すると、視野はより大きく広げられますので、小さな群を牧する者にとっては貴重な時間です。働き人には、自分自身とその働きを吟味する時が必要であり、私はこれを「チューニング」と呼んでいます。

### 【本論】

今日の箇所では、回心後のパウロが数年間独自の宣教活動を経た上で、エルサレム教会のペテロに会いに行った出来事が伝えられています。ここには恐らく、パウロが自分の働きの方向性が間違っていないかどうかを確認しに行ったという意味が含まれていたと思われま

## 本論 1. ペテロ訪問の目的

それから三年後に、エルサレムに上ってケファを訪ね、彼のところに十五日間滞在しました。(1:18)

唐突に「三年後」と言われていますが、これはパウロの回心と召命の出来事から数えて足掛け三年という意味です。ユダヤにおける数の数え方は、出来事が起きた日(年)を含める傾向がある(主イエスの十字架の死から復活までも足掛け三日)。この期間にパウロが何をしていたかが重要なのですが、それは17節に書かれているように、「**直ちにアラビアに出て行き、そこから再びダマスコに戻った**」ということです。パウロは救われたと同時に使徒としての召命を受け、導かれるままに宣教の働きに飛び込んでいきました。パウロが特に強調しているのは、そのために誰かから特別な指導を受けたわけではないということです。「**私よりも先に使徒となった人たちがいるエルサレムへ上ることもせず、直ちにアラビアに出て行き**」(1:17a)。彼の指導者は主イエスだけであった。何をどう宣べ伝えるべきかは主イエスによって直接示されたのです。その最初の指示が「アラビアへ伝道に行け!」だった。この時のアラビア伝道を示唆する記事が二つほどありますので、引用してみましょう。

- ・ かなりの日数がたって、ユダヤ人はサウロを殺そうとたくらんだが、その陰謀はサウロの知るところとなった。しかし、ユダヤ人は彼を殺そうと、昼も夜も町の門で見張っていた。そこで、サウロの弟子たちは、夜の間、彼を連れ出し、籠に乗せて町の城壁伝いにつり降ろした。(使徒 9:23-25)
- ・ ダマスコでアレタ王の代官が、私を捕らえようとして、ダマスコ人の町を見張っていたとき、私は、窓から籠で城壁伝いにつり降ろされて、彼の手を逃れたのでした。

(Ⅱコリント 11:32-33)

この二つの記事はおそらく同じ出来事を伝えていると思われます。アラビア伝道のさなか、パウロはアラビアのアレタ王に命を狙われるようになり、ダマスコへ戻らざるをえない状況となった。ところが、ダマスコでも暗殺者が待ち受けていたのです。この一連の出来事を辿っていくときに、パウロにとっての最初の伝道活動はほとんど稔りがなかったと察することができます。しかし、彼には既に弟子が与えられていたという点も見落としてはならないでしょう。パウロの語る福音に呼応した人々も中にはいたようなのです。

この最初の挫折、異邦人伝道がなかなかうまく進んで行かない経験を経た上で、パウロは初めてエルサレムへ上って行きました。主イエス直属の弟子に会うことにより、自分のここ数年の活動が間違っていないかどうかを確認するためだったと想像します。

15 節に登場する「ケファ」とはペテロのアラム語名であり、ペテロ（ギリシャ語名）もケファもいずれも「岩」を意味する愛称です。ここで二人の大使徒が対面することになったのですが、私はこのパウロの訪問の記事を見ると、いつもバッハがヘンデルに会いに行こうとした出来事を思い起こします。この二人の大作曲家はついに会えずじまいとなったのですが、パウロとペテロは顔と顔とを合わせ、二週間時間を共にして語り合いました。この 15 日の間には二度の安息日が挟まれていたはずですから、一緒に礼拝も守ったはずなのです。

## 本論 2. 二人が話した事柄

さて、ここで読者は想像力たくましく二人が交わした会話を思い巡らしてみる必要があります。パウロは昇天前の主イエスと直接（肉において）会ったことはなかったと思われまますから、主がどのように生き、弟子たちに何を教え、何をなさったかを聞きたいと切望していたはずですが、また、ペテロ側もかつて教会を迫害していたサウロが 180 度の方向転換をして主イエスを宣べ伝えているという噂を聞いていたはずですから、パウロがどういう人で何を語っているのかを知りたかったことでしょう。このように、福音宣教における二人の巨頭がここに出会うこととなったのです。この会談では、主に三つのことが話し合われたと思われまます。

- ①パウロの回心と召命の体験
- ②ペテロが聞いた主のことば
- ③異邦人宣教は御心か

これらの内容を織り交ぜた二人の会話を想像し、私なりに台本を作ってみました。

**ペテロ** これはこれは、パウロさん。エルサレム教会へようこそ。はるばる訪ねてきてくださり、ありがとうございます。あなたの噂はそこかしこで聞いています。なんでも、かつてはキリスト教徒を撲滅しようとしていたところ、ある日を境に真逆の人生を歩み始められたそうですね。

**パウロ** はじめまして、ペテロさん。そうなのです。私は当初、キリスト教はユダヤ教の異端だと認識していました。律法を行なわなくても神の救いにあずかれる、殊に異邦人さえも救われうるなどという教えは、我々ユダヤ人にとってとんでもない話であり、伝統に著しく反することだったからです。その「教祖」であったナザレのイエスは安息日規定を平然と破り、「愛は律法を超えるものだ」などと教えていたと聞きます。あなたはそのような現場を実際に見られたので

しょう。

**ペテロ** その通りです。主が語られることも行動も、あまりに常軌を逸していたため、従っていた私たちはいつもヒヤヒヤものでした。かつてのあなたのように、命を狙う者が後を絶ちませんでしたから。ところで、あなたが厳格なパリサイ派としての生き方を捨ててキリスト教の伝道者となられたのには、どのようなきさつがあったのですか？

**パウロ** よくぞ聞いてくれました。それこそ私の救いの証であり、召命そのものなのです。ご存知のように、私は立派な執事であったステパノを罪に定め、筆頭となって彼の処刑を実施しました。その後もキリスト教会を荒らし回り、多くの信者を捕え、恐れられていました。これはすべて神への熱心ゆえに行なったことです。私はそのような活動を通して、自分はまさに神に仕えていると信じて疑いませんでした。私は大祭司のところへ赴き、私の故郷であるダマスコの諸会堂宛てに手紙を書いてもらい、すべてのキリスト者を捕縛する権限を得ようとしていました。ところが、その旅の途上でとんでもない出来事が起きたのです。突然天から見たこともないほどの眩い光が私を照らし、一瞬にして何も見えなくなりました。そして、天から声が聞こえたのです。「サウル、サウル、なぜ私を迫害するのか」と。私はその声が誰のものであるか分からず、問い返しました。「主よ、あなたはどなたですか」と。すると、こう言う声が聞こえました。「私は、あなたが迫害しているイエスである」と。私はあまりの衝撃で息も止まらんばかりでした。自分が迫害してきた「キリスト者」たちのことを、主は自分自身だと言われたのですから。私はキリスト者を殺めることこそが神に仕えることだと思っていたのに、実は神を迫害していたことに気づいたのです。

**ペテロ** なるほど、主はそのようにしてあなたに現れてくださったのですね。そして、その後はどのような指示があったのですか？

**パウロ** 主は私を異邦人の使徒となるようお命じになりました。私はその指示に従い、足掛け三年アラビア伝道に従事してきました。しかし、この期間、私は懸命に福音を宣べ伝えましたが、思うような成果が得られず、かえってユダヤ人たちに命を狙われるようになりました。それもそのはずで、彼らは私がユダヤ教からキリスト教に寝返ったと考えていますし、かつての私と同じ思いをもって「危険分子」を排除しようとしていますからね。

**ペテロ** よくぞ生きてここにやって来られました。ところで、主があなたに異邦人伝道をお命じになったというところが大変興味深いです。その辺のことをもう少し

お聞かせいただけませんか。

**パウロ** はい、主ご自身が私に何を宣べ伝えるべきかを教えてくださいました。それは、律法の行ないなしに人は神の恵みによって救われうるということです。その律法の行ないのないの中には「割礼」も含まれています。ユダヤ人が伝統的に守り続けてきた「契約のしるし」なしに、異邦人は信仰のみによって救われるということなのです。私はこの主張ゆえにユダヤ人の迫害に遭っているとも言えます。

**ペテロ** 主の教えの原理は確かにそこに行き着きますね。主はその公生涯において、遊女・取税人・罪人と一緒に食事をし、サマリヤ人、フェニキア人、ローマ人にも救いの恵みを語っておられました。もちろん、彼らに割礼を求めることはなく、そのままの姿で「あなたの信仰は立派だ」「あなたが信じた通りになるように」と言っておられました。

**パウロ** そこなんです！私が確認したかったことは！「信仰による義」を宣べ伝えることでこれほど迫害を受けるのであれば、もしかしたら私が聞いた福音の方に何か間違いがあるのではないかと不安になることもあったのです。だからこそ、主の直系の弟子であるあなたから主が何を語っておられたかをお聞きしたかったのです。

**ペテロ** 私の主が言っておられたこととあなたが宣べ伝えていることとは寸分のズレもありません。主は確かにあなたを異邦人の使徒として召されたのです。

### 本論 3. 異邦人宣教の後押し

私は二人の会話を以上のようにイメージしてみました。今日の箇所に戻りますと、その後パウロはシリア、キリキア地方の伝道に向かったと書かれています (1:21)。シリアとは後の宣教の拠点となるアンテオケを中心とした地域 (使徒 11:25-26)、キリキアとはパウロの生地タルソを中心とした小アジア南東の地域です<sup>i</sup>。いずれも異邦人の土地であることから、パウロがペテロとの対話によって確信を得て次なる異邦人宣教に旅立ったことが窺えるでしょう。ここでパウロがガラテヤ人たちに対して特に強調していることは、自分に異邦人宣教を指示しているのはペテロではなく主イエスご自身であるということです。ペテロとの会見は、彼の宣教活動の是非の確認にすぎなかった。そのことを強調するために、わざわざこの時に会ったのは他に主の兄弟ヤコブしかいなかったということも加えています (1:19)。このヤコブは、主イエスの弟に当たる人物で、かつては主を信じていませんでしたが (ヨハネ 7:5)、復活の主と出会ったことによって信仰を持ち、この時には既にエルサレム教会で指導的な立場に立っていたようです。

いずれにせよ、パウロが言いたいことは、このヤコブからさえも自分は福音を学んだのではないということです。主ご自身が自分を直接召してすべてを教えてくださいましたのだと。

**ただ彼らは、「かつて我々を迫害した者が、当時は滅ぼそうとしていた信仰を、今は告げ知らせている」と聞いて、私のことで神を崇めていました。(1:23-24)**

最終的にパウロは、栄光を神に帰しています。かつての迫害者が真逆の人生へと導かれているのを見た人々（シリア、ギリキア地方のキリスト者）は、異邦人に対して熱心に福音を宣べ伝えているパウロの姿を見て、神のなさることの不思議を喜びました。

### 【結論】

パウロは自分の働きの向かっている方向性を確認するためにペテロに会いに行っただと思われま。主が直接彼に教えてくださいましたという事実はあるものの、伝道が思うように進まないとき、「本当にこれでよいのだろうか」という不安がよぎったこともあったのでしょ。ペテロと会って話し合ったことにより、彼は主の御心が一つであることを知りました。恵みは変わらない。福音の原理も変わることはない。そこに立って働いていけばよいという確信を得ました。

私たちの信仰の歩みにも常にチューニングが必要です。年単位で自分の働きを振り返る必要もありますが、大きな音の狂いに至る前に、こまめなメンテナンスが必要でしょう。毎週の礼拝はその役割を果たしています。また、週半ばの祈禱会や、その他の聖徒の交わりにおいても、信仰の弦は整えられます。

まだ信仰を持っておられない方も、ご自分の人生の向きはこれで良いだろうかと内省してみてください、その向かう方向がどこであるかを確かめていただけたらと思います。人生の目的が神に向かっているかどうか、すべてはこの一点に集約されるのです。

【祈り】

人を罪の内より救い、同時に福音宣教の働きへと召し出し給う、天の父なる神様。パウロにとって、「救い」イコール「召し」でありました。形は異なれど、すべて救われる人にとって、これは普遍的な神の御業でありましょう。私たちもまた、何らかの意味で宣教者としての召命を受けているはずです。私たちの生き方、私たちの働きの向かう方向がいつもあなたでありますように。度々道を踏み外す私たちの「人生の弦」を整え、常に正道へと導いてください。自分の歩んでいる道がどこであるかを、一人ひとりが確認する日々でありますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

イエスを信じる者に罪の赦しを与え、価なしの救いにあずからせ給う、父なる神の愛、人種、性別、国籍を超えた福音を、すべての人に宣べ伝えさせ給う、主イエス・キリストの恵み、

働きの向き、生き方そのものの方向性を常に確認させ、神の栄光へと導き給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。

